

パースの科学観と宗教観

崎 山 勝 啓

1

現代の哲学は、キリスト教的な価値体系に対する近代科学の発展と、産業革命の進展による衝撃のなかから生まれたといえる。ラッセルも、哲学はかつて神学と科学との間の何物かであったし、また、いまなおそうなのであると述べているように、哲学は、絶えず一方では科学と、他方では宗教と対決しながら自らの歩みをとげてきたのであり、両者と如何なる関係にあるかが、哲学の内容に大きくかかわっているばかりでなく、むしろ、そのことによって、哲学は自らの展開と変貌をとげてきたのである。このことは、プラグマティズムにおいても例外ではなかった。そればかりか、むしろプラグマティズムは両者との対決の仕方における独自性によって、これまでのヨーロッパ哲学の移植史にピリオッドを打つことができたのである。

プラグマティズム発生の地であるニュー・イングランドは、ある意味では、アメリカ思想史に一貫して見られるピューリタニズムの拠点であると同時に、当時のアメリカ商工業の中心地でもあった。従って、そこではピューリタニ

ズムによってはぐくまれた宗教的な思考形体と、産業の発展が要求する科学的・技術的な思考形体との対立を如何に調整するかが、思想家の課題となっていた。それは南北戦争によって産業革命が急速に進んだ結果、当時まで支配的であったエマソンによって代表されるロマン主義思想に代って、一八七〇年代のはじめ、きわめてアメリカ的な思想としてプラグマティズムが台頭したのである。⁽¹⁾アメリカ思想史において、プラグマティズムは、コンコードの超絶主義者 (transcendentalist) たちと、セント・ルイスのヘーゲル主義者たちを中心とするロマン主義思想を克服する思想として評価されている。それは、一方ではエマソン等によってヒューマニズされたピューリタンの宗教的世界観をさらに世俗化し、これを科学的世界観と調和させ、他方ではヘーゲルの弁証法を科学的方法と矛盾しない形に改造したのである。科学的世界観と宗教的世界観との調整と、弁証法の科学的実験的改造というこの二つの問題は、すくなくともパースとデューイの基本的なテーマであった。⁽²⁾ジェイムズは主として前者の問題に力を注いでいる。

このように、プラグマティズムが、ピューリタンの伝統を科学的思惟の立場と衝突しない仕方で見えなおそうとするとき、そこには両者の調整という当然の要求が見られる。このような状況にあつて、ジェイムズは、その著『プラグマティズム』において、「諸君はふたつのものを結合せしめるようなひとつの体系を要求している。すなわち一方においては事実に対する科学的忠実さと事実を進んで尊重しようとする熱意、簡単にいえば、適応と順応の精神であり、もう一つは、宗教的タイプであるとロマン的タイプであるとを問わず、人間的価値に対する古来の信頼およびこの信頼から生ずる人間の自発性である。そしてこれがつまり諸君のデイレクショナルなものである。⁽³⁾」「私がみずからまず解決に手がけようとするのはまさにこの点なのである。私は両種の要求を満足させることの出来る一つの哲学として、プラグマティズムという奇妙な名前のものを提唱する。⁽⁴⁾」と述べている。

このような、科学的立場と宗教的立場との調整としてのプラグマティズムは、一方において、実験主義的な側面を

もち、他方において、功利主義的な側面をもっている。G・H・ミードは、「ジェイムズやデューイの研究の中心は、ある思想や仮説を実際的な場における実験をとおして、その真理性を検証するという共通の態度にある。」と述べたが、要するに、プラグマティズムは思想の真理性について、実験的もしくは操作的な態度をとるのである。しかしそれと同時に思想の目的性を考慮に入れるという点で、功利主義的傾向をもつ。このことについてデューイは次のように説明している。「プラグマティズムは知識の過程および内容が、実際のな、目的をもった考慮によって決定されるという主張であり、純粹に理論的な、思弁的な、あるいは抽象的にかつ知的な考慮によって決定された知識の如きものではないという主張である。」⁽⁶⁾

このような二つの側面は、パースがプラグマティズムという名称を採用したときから、すでに意識されていた。彼は、「praktisch」と「pragmatisch」は二つの極ほどはなれている。前者は、実験主義の様式のものにとって、そこに堅固な足場を見出すことのできない思想領域に属しているが、後者は、ある明確な世俗的な目的との関係を表現している。このような考慮から、私はプラグマティズムという名称を採るに至ったのである。」⁽⁷⁾と述べているように、プラグマティズムが最初の方向づけにおいてもっていたこのような実験主義的で、かつ功利主義的な二側面は、科学的立場と宗教的立場の両者を共に認めようとする方法と密接な関係にあるといえる。

註

- (1) この辺の事情については、H・G・タウンSEND著『アメリカ哲学史』(市井三郎訳・岩波現代叢書)第一～八章参照。
- (2) この問題については、立正大学文学部論叢一九号「プラグマティズムの理論」でパースとデューイの論理をヘーゲル弁証法との関連において捉えてみた。
- (3) ジェイムズ著『プラグマティズム』(梶田啓三郎訳・岩波文庫)二二頁。
- (4) 同上三〇頁。

- (5) G. H. Mead, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, 1936. p. 344.
 (6) *The Century Dictionary Supplement*, II, 1909, p. 1050.
 (7) C. S. Peirce, *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vol. 5, 412. 1932-5.

2

ペースは、一八七七年から七八年にかけて『科学の論理学の解明』(Illustrations of the Logic of Science) というテーマで、『Popular Science Monthly』に六つの連続論文を発表している。その第一論文の『信念の定め方』(The Fixation of Belief, 1877)において、「私たちが、そこで発見したのは、思想という行動が、疑問という刺激によっておこされ、信念が到達される場合におわるということであり、従って、信念の生産が思想の主要機能であるということであった⁽¹⁾。」と述べている。ここでいう信念とは、「それに従って、私たちが行動する用意のある観念⁽²⁾」であり、信念のもてないとき、私たちは不安にさらされている。「このような疑いをもった不安な状態は、信念の状態に達しようとするものがきをひき起す。かかるものがきを探究と名づける⁽³⁾。」従って、意見〔信念〕の確定 (the Settlement of opinion)こそ探究の唯一の目標にほかならない。

そこで、ペースは、信念の定め方として、四つの方法を挙げている。第一は、「固執の方法」(method of tenacity)である。懐疑の焦躁感から救われようとして、自ら正しいと決めてかかる一つの信念に頑固に固執する極めて個人的・主観的な方法である。第二は、「権威の方法」(method of authority)であり、政府や教会の超個人的な組織が、その絶対的権力をもって、一定の教説や信念を真理だと信ぜさせるのである。第三は、いわゆる「先天的方法」(a priori method)であり、「理性に叶う (agreeable to reason) が如くみなされる根本命題」に基づいて、「通常、

あるいは少なくとも大部分は観察された諸事実に基づかず、信念を構成する」方法である。それは、理性の見地からみて、前二者の方法に比べると、はるかに知的であり、注目に値する。「その最も完全な例は、従来の形而上学に見出される」が、この方法の基本的な欠点は、次の事実にある。すなわち、「この方法によれば、学問的研究を好みの発展に似たものと見る。だが、好みは常に流行に左右されやすいものであるから、従って、従来の形而上学者達は決して確固とした同意に到達しなかった。」また、この方法は、「私たちの意見から偶然的・恣意的な要素を取りのぞくことが出来ない⁽⁵⁾。」こうした方法は、到底近代科学の洗礼を受けた実験的な型の人間を満足させない。そこで、信念を定めるためには、主観的条件によってではなく、客観的・社会的条件に基づき、「各人の究極の結論が一致するような方法が取られなければならない。この方法が「科学の方法」(method of science)⁽⁶⁾にはかならない。

この方法は、次のような根本的な仮説に基づいている。「实在の事物 (real things) が存在するということを認めねばならない。そうした事物の性質は、その事物についての私たちの意見によって左右されることはない。その实在物 (Thing) は、規則正しい法則に従って私たちの感覚器官に作用を及ぼし」、「誰でも、その事物について十分な経験とそれに関する十分な推理をもつならば、一つの真理 (The One True Conclusion) に到達するであろう。」⁽⁷⁾

このような仮説は、パースが『信念の定め方』に続いて発表した『われわれの観念を明晰にする方法』(How to Make Our Ideas Clear) や、より具体的に述べられている。「科学の方法に従事する人は、すべて探究の過程を充分おし進めさえすれば、如何なる問題に対しても、その探究の過程は一定の解決を与えてくれるだろう。」例えば、何人かの科学者が同一物の研究について、あらゆる異った方法で行なう場合、「彼らは最初、別々の結果を得るであろうが、その方法と諸過程を完全にしてゆくにともない、いくつもの結果は、運命づけられた中心点に向って、確実に複合していくことに気づくだろう。すべての科学的探究は、これと同じ経過をたどる。ひとびとは、通常、最も敵対

的な諸見解をもって出発するであろうが、探究の過程が進むにつれて彼ら自身の外側にある一つの力によって、一つの同じ結論に至らされる。」そして、「探究者が究極において一致するように運命づけられている意見こそ、真理という言葉の意味するものであり、この意見の中に表現されている対象こそ、実在する対象なのである。」⁽⁸⁾

このような実験室の思考法を一般化しようとする彼の理論は、如何なるものも不可能なものではなく、如何なる場合でも自己のものとなし得ないものは存在しない。すべては流動し、すべては展開する。それが絶対的であり、完全であり、そして、それが故に、この過程を制約し、はばむものは、すべて科学の敵である。それが、いかに理論的に完成された体系をなし、崇高なる理念を持っていたとしても、信ずるには値しないし、意味を持たないことになる。ここでは観念や思想の意味は、それ自身にあるのではなく、ただ、私たちの眼前で事実において、生活に変化を与え効果を与えたとき、あるいは与えるであろうとき存在する。かかるパースの主張は、当時のアメリカ人の思惟方法を如実にいい現わしている。それは、その激しい社会的変動にあって、おそいくる困難や障害と積極的に対決し、すばやく適応し、確信をもって自分のものとしていったアメリカ人の雰囲気表現している。

また、彼は、科学について、次のような解釈をつけている。「科学という言葉が、しばしば科学者によって口にされたが、それは、前の時代に規定され体系づけられた知識や書物に書き記されたことを示したのではなく、生活の一態度 (a mode of life) を示したものと私は確信する。すなわち、それは知識ではなく思慮深い知識探究である。」⁽⁹⁾一九世紀の科学者は、知識探究を科学としたが「それは用語法からいえば、すでに誤用であった。今日の科学者にも、この誤用が残っている。科学によって意味したものは、あるいは、今日、意味するものは、用語法からいえば、哲学といわれるべきである。」⁽¹⁰⁾

もし、パースが主張するように、科学と哲学が、根本的に区別されないとするならば、一体、彼の哲学の存在理由

は何か。これに対して彼は、「存在論的形而上学の殆んどすべての命題が、意味をもたない空論にすぎないか、あるいは全く不合理であることを示し」、「これらすべてを追放して、真の科学の観察的方法によって、研究可能な問題のみを残すことにある。」⁽¹¹⁾と述べている。

パースのプラグマティズムは、概念もしくは命題の意味を明らかにし、それを有意義なものと無意味なものに整理するという意味基準の提案に他ならない。そして、この意味基準を示すものが「プラグマティズム守則」(pragmatic maxim)である。「私たちの概念の対象が実際的影響(practical bearings)をもつと思われる如何なる結果をもち得ると私たちが考えるかをかえりみよ。そのとき、これらの効果についての私たちの概念が、その対象についての私たちの概念のすべてである。」⁽¹²⁾この守則によれば、概念の意味を明らかにするには、その概念のもたらす「実際的影響」を、まず明確にすべきである。つまり、概念そのものの予示する可能的経験を明らかにするように、その概念を翻訳しさえすればよいことになる。あらゆる概念の意味は「これこれの実験をすれば、これこれの経験に出会うであろう」と翻訳することによって、明らかにされるといのである。そして、翻訳不可能な概念は「意味を有しない」ことになる。また、異なるように考えられる二つの概念も、翻訳によって同一の結果を示すならば、「同義的」とされる。このような意味基準によって、パースは、従来の形而上学の問題や宗教上の議論も、あるいは無意味なものとし、あるいは「言葉の上の論争」にすぎない。と説くのである。

しかし、パースが一八九一年から一八九三年にかけて“*The Monist*”に掲載した、『理論の建築術』(*The Architecture of Theories*)において、きわめて思弁的傾向を示す形而上学が展開されている。宇宙の初期の段階においては「連関も秩序もない、カオスがあり」、そこに「習慣への傾向が生じる」ことによって、それが「他の進化の諸原理と共に、宇宙のあらゆる秩序を進化せしめ」、ついに「完全な、合理的、調和的なコスモス」⁽¹³⁾に至る。という宇宙進

化の過程について述べている。

更に彼は「The Monist」掲載の最後の論文『創造的愛』(Evolutionary Love)において、進化思想を「偶然主義」(tychasticism)、「必然主義」(anacasticism)、「アガペ主義」(agapasticism)に分類し、彼自らは、「成長は愛のみから生ずる」というヨハネの教えを「進化論の定式」⁽¹⁵⁾とみなし、「偶然的進化や、必然的進化は、アガペ的進化の墮落したものである。」⁽¹⁶⁾と説き、偶然主義であるダーウィンの進化論は、機会さえあれば、いつでも隣人を踏みつけることによって生ずる進化であり、まさに、貧欲の福音(the Gospel of Greed)であると批判し、すべての個人が、その個人性を隣人への共感にとけこませてしまうことによって、進歩が生ずると説くところのキリストの福音(the Gospel of Christ) すなわち、アガペ主義に対立すると述べている。⁽¹⁷⁾一方、機械論的決定論に対して「事物の多様性や特殊性は偶然に起因するのであって、宇宙におけるあらゆる事実は精密なる法則性によって支配されているというのは多くの人間が冒しがちな誤りである。」⁽¹⁸⁾と批判し、宇宙は完全な法則性の支配にむかって進むであろうが、そこには、常に免れがたい偶然性が残る。その偶然性によって事物の多様性が生ずると主張するのである。

このような晩年におけるパースの宇宙論的哲学は、根本的には、彼自身、宗教的立場に立っていたことが理解できる。彼の哲学は、「ヨハネ伝に導かれた哲学」⁽¹⁹⁾と彼自身が述べているように、究極の立場をキリスト教的な愛の福音に求めている。それは精神と物質の連続性を説くと共に、必然主義や機械論的決定論に対して、偶然や自由の要素をあぐまで擁護することを試みているのである。

そこで、かかる宗教的立場を取る彼の思想は、はたして彼が提唱する「プラグマティズム守則」と相容れるものであるかどうか、このことを、たちいて検討するために、再びその守則を取り上げてみると、概念の意味基準は、「現に、実際的影響をもつ効果」とはいわないうで、「実際的影響をもつと考えられる効果」と述べている。すなわち、あ

る概念の意味は、実験条件に翻訳され、現に検証されることのみによって、確定するのではなく、現に検証されなくても、検証が原理的に可能であれば有意味とされるのである。

そして、パースは、彼の宇宙論的哲学も、未来において、検証が可能であると考えた。彼は、『理論の建築術』の最後を次のように結んでいる。「以上の考えは、私が精密に構成したものである。それは私たちの知る宇宙の重要な特質を説明しているし、それはまた、より多くのことを予言している。しかしそれは、新しい観察によってのみ検証され得るものである。願わくば、将来の研究者が、この根拠を再検討し、その結果を公表する機会をもつように」⁽²⁰⁾。

彼の宇宙論的哲学は、将来において検証が可能であると考えられる限り、彼の守則に抵触しないことになる。しかし、このような宗教的見解が未来において、検証可能である、という根拠がどこにあるかは明確にされていない。もし彼のアガペ主義を、その根拠が明確でないままに、検証可能として認められるならば、同様に、彼の守則が斥ける形而上学的な、あるいは宗教的な思弁もまた、再登場を許されることになる。そこで、彼のプラグマティズムには、意味基準の提案という主目的とは異なる別の意図があったのではないかという問題がでてくる。その問題は、彼が、従来の実証主義哲学に対して、「不純な形而上学を内に秘めながら、人類の本能的信仰に暴力を加える」ものであると批判し、これに対して、「反科学的な方法に基づく従来の哲学を純化し、それを宗教的、道徳的目標に向けさせることにある」⁽²¹⁾と述べている。

このような、パースのプラグマティズムは、その主目的が概念の意味の明晰化にあり、実験条件に翻訳され、検証され得ない概念を無意味なものとして追放するという実証主義的立場に立つ一方、「人類の本能的信仰」を擁護し、従来の哲学を宗教的・道徳的な目標に向けさせるといふ実際的な目的をもっていたことがわかる。従って、彼のプラグマティズムが「存在論的形而上学に攻撃を加える意味論的不可知論」⁽²²⁾といわれる一方、晩年において、「宗教的な観

念論の神秘主義的要素に近づいた。⁽²³⁾」といわれる理由がここにある。そして、この宗教的な神秘主義的要素が「創造的愛による進化」を説く宇宙論的哲学に含まれていることは、既に述べたが、この宇宙論的哲学こそ、彼のプラグマティズムに隠されている、もう一つの意図の表明に他ならない。そこから、彼は、次のように述べる。プラグマティズムは、「他の厳密な意味での実証主義者の如く、形而上学を、それが長たらしいパロディであれ、何であれ、単に嘲笑し去るのでなく、そこから、宇宙論に生命と光を与えるに役立つ、貴重な精髓を抽出する」⁽²⁴⁾。

かかる、宗教的・道徳的意図をもって構成された宇宙論的哲学に対して生命と光を与えるに役立つ限りの思想からその精髓を抽出しようとする態度は、極めて便宜主義的な、功利主義的な態度である。一方における、実証主義的な実験主義的な主張と、他方における、便宜主義的な、功利主義的な態度との結合こそ、パースの哲学における弱点を構成し、彼の理論の不徹底さを示すものであることが指摘される。

註

- (1) Collected Papers of Charles Sanders Peirce, vol. 5. 362.
- (2) *ibid.* 5. 371.
- (3) *ibid.* 5. 374.
- (4) *ibid.* 5. 382.
- (5) *ibid.* 5. 383.
- (6) *ibid.* 5. 384.
- (7) *ibid.* 5. 384.
- (8) *ibid.* 5. 407.
- (9) The 19th Century, p. 314.
- (10) *ibid.* p. 315.
- (11) C. S. Peirce, *op. cit.*, 5. 423.

- (12) *ibid.* 5. 402.
- (13) *ibid.* 6. 33.
- (14) *ibid.* 6. 302.
- (15) *ibid.* 6. 289.
- (16) *ibid.* 6. 303.
- (17) *ibid.* 6. 294.
- (18) *ibid.* 6. 39.
- (19) *ibid.* 6. 289.
- (20) *ibid.* 6. 34.
- (21) cf. P. P. Wiener, *Evolution and Founders of Pragmatism*, 1949, p. 85.
- (22) M. G. White, (ed.), *The Age of Analysis*, 1955, p. 139.
- (23) P. P. Wiener, *op. cit.*, p. 93.
- (24) C. S. Peirce, *op. cit.*, 5. 423.

3

以上のようなパースのプラグマティズムにみられる科学観と宗教観は、極めて特徴的な「アメリカ的条件」のなかで形成され、その雰囲気を巧みに捉え、浸透していった。

彼が思惟する時、それは常に具体的状況における問題意識からなされる。巨大な大工場の建設、摩天楼の出現、大農場の機械化等、時代の新しい条件は人間の行為の新しい原型を要求する。彼はこの新しい行為の原型は、何よりも実験的思考、習慣変化のなかに見出されるという。彼はかかる発展期の状況においては、科学や産業上において発展せるこの実験的方法を、単にそのみでなく、更に宗教や人間の問題にまで拡大することであると考えたのである。

つまり、それは、伝統的な哲学の専制や絶対化を排撃して、現代の科学と社会的条件に適応した新しい自然観と人間観を形成することであった。

かくて、パースは哲学や科学、宗教等をあくまでも日常生活や経験の地盤にひきおろすのである。そこでは、彼の関心はもはや絶対的、普遍的なものから流動的、特殊的、具体的なものへ移り、原理や真理はあくまでも日常的経験の範囲において判断される。

勿論パースは、あらゆる問題が科学と技術の発達によって解決されてしまうと、安易に考えられていたのではないむしろ、私たちは、現代の具体的状況において、当面する困難を克服しつつ、絶えずよりよき状態へと自ら進む過程にあり、この進歩と完成化の過程は、ここでは未来に向って無限に開かれている。それは、いわゆる改良主義(meliorism)である。しかも、よりよき状態への進歩が、それ自体保証されており、そこに真理の根拠がおかれているというこのことは、その過程全体が一つの完結的な形で定立されていることに他ならない。すなわち、私たちが技術的知性を活用して、合理的に行動してゆけば、いつもよい結果を得ると考えられる、という前提にある。改良主義は最善主義(optimism 楽天主義)を予想してのみ成立するのである。プラグマティズムの真理論において、経験が自律的・自己充足的とされるとき、その背後には人生に対するこうした態度が存するのであり、彼の宗教観にもかかる考え方がひそんでいるのではないか。

しかし、人間は、こうした考え方によって、果して満され得るであろうか。私たちが如何に生き、如何に行なうべきかという問は、はたしてその成果によって答える得るであろうか。合理性への信頼と人間的善意とが根底からくつがえされるようなことはないだろうか。かかる問題に、私たちが直面した場合、パースがくり返し説いている信念も深刻な疑問にさらされざるを得ないであろう。